

第2問 次の文章を読み、以下の問1と問2に答えなさい。

僕の仕事哲学を一言でいうと「絶対悲観主義」ということになる。物事が自分の思い通りにうまくいくという期待をなるべく持たないようにする。何事においても「ま、うまくいかないだろうな……(でも、ちょっとやってみるか……)」と構えておく。こういうマインドセットを絶対悲観主義と呼んでいる。

「事前」と「事後」、「うまくいく」と「うまくいかない」、この2つの軸を組み合わせると、仕事には4つの成り行きというかパターンがある。

- (1) 事前にうまくいくとっていて、やってみたところ実際にうまくいった
- (2) 事前にはうまくいかないと思っていたが、やってみたところうまくいった
- (3) 事前にうまくいくとっていたが、やってみたところ実際はうまくいかなかった
- (4) 事前にうまくいかないとっていて、やってみたところやはりうまくいかなかった

このうち僕がスキなのは、なんといっても(2)だ。うまくいかないだろうと悲観的に見積もっていただけに、うまくいったときのうれしさは大きくなる。喜びが上振れする。最悪なのは(3)。うまくいくとっていたところの失敗だから、ダメージが大きい。これと比べれば(4)のほうがはるかにマシだ。(1)よりも(4)のほうがスキなくらいだ。

ベルナール・フォントネル(フランスの思想家)はうまいこという。「幸福のもっとも大きな障害は、過大な幸福を期待することである」。民主主義にして自由主義、レッセフェールの時代である。これだけ多くの人がそれなりに利害をかかえて自由意思で動いている。そんな世の中、自分の思い通りにならないのが当たり前で、思い通りになることがあったとしたらそれは例外だ。負けることの方がずっと多い。もちろん、うまくいくに越したことはない。それでも、負けは負けでわりと滋味がある。「そうは問屋が卸さない、か……」などつぶやきつつ、うまくいかなかった理由に思いをめぐらせるのはしみじみと味わい深いひとときだ。いくら経験を重ねても勝率はたいして上がらない。それでも負け方は確実にうまくなっていく。年季の入った人の中には、負け方が実にキレイな人がいる。僕はこういう人を信用する。「負け戦、ニヤリと笑って受け止める」。これが本当のプロだ。(中略)

邪魔になるのはプライドだ。プライドがある人はすぐに傷つく。傷つくのはイヤで怖いから、動けなくなる。動くときも失敗を避けようとしてへんな計画を立てたりする。で、ますます疲弊する。僕の見るところ、若い人ほどこの落とし穴にはまりやすい。若くてヤル気のある人はやたらと「挑戦します!」というのだが、総じてプライドが高い。しくじることを受け入れられない。だから挑戦といいつつも、結果が心配で仕方がない。

僕のような者でも「こういうことに挑戦しようと思うのだが、何かアドバイスをくれないか」と聞かれることがある。僕はこう言うようにしている。「心配する必要まったくなし。絶対うまくいかないから」。決まってイヤな顔をされる。しかし、そういうことなのだ。仕事には矜持(きょうじ)を持たなければならない。プライドは大切である。しかし、それはある程度の成果を出し、実績を積んでからの話だ。自分(だけ)は特別だと思ひ込む。それが若者といえればそれまでだが、しょせん99%はフツーの人。「自分はまだ何者でもない」という認識からスタートするに越したことはない。

若者にこそ絶対悲観主義の構えを勧めたい。気軽にフルスイングし、どんどん空振りするに若くはなし。若いときほど失敗における sunk cost は小さい。若者の特権は「これから先が長くある」「柔軟性がある」ではない。「まだ何にもない」ということにある。

(楠木建「まだ何者でもない」と認識を プライドは邪魔になる」日本経済新聞 2020.4.26 を元に作成)

問1 仕事の成り行きのパターンの中で(1)よりも(4)が「スキ」だという理由について、本文から読み取れることを記述しなさい(350字~400字)。

問2 筆者は「絶対悲観主義」を若者に勧めているが、あなたはそれにどう応えるか?自分なりの考えを書きなさい(350字~400字)。